

分科会 A 記録

日時：平成 24 年 5 月 25 日（金） 10：00～12：00、13：30～15：30

場所：日本科学未来館

テーマ：やってみよう 図書館での医療・健康情報サービス～業務の基本を学ぶ・広げる～

第 83 回特定非営利法人日本医学図書館協会総会 分科会 A として、「やってみよう 図書館での医療・健康情報サービス～業務の基本を学ぶ・広げる～」が開催された。市川美智子氏（愛知医科大学医学情報センター）が司会をつとめ、5 名の講師からの発表があり、続いてフロアからの質問に対し回答や討議が行われた。午前 98 名・午後 81 名が参加し活発に議論が行われた

1. 趣旨説明・講師紹介 司会：市川美智子氏（愛知医科大学医学情報センター）
10:00～10:10（10 分）
2. ワーキンググループ活動報告 牛澤典子氏（東邦大学医学メディアセンター）
10:10～10:25（15 分）
3. 医療・健康情報サービスの現状 柚木聖氏（浦安市立図書館）
10:25～11:10（45 分）
4. 医療・健康情報のレファレンス 高橋宏美氏（相模原市立図書館）
11:10～11:55（45 分）
5. 昼食休憩
企画（1）友達 100 人できるかな
企画（2）宗太郎人気ポーズ投票
6. 医学・健康情報の評価 諏訪部直子氏（杏林大学医学図書館）
13:30～14:15（45 分）
7. 選書 塚田薫代氏（静岡県立こども病院医学図書室）
14:15～15:00（45 分）
8. 質疑応答・まとめ
15:05～15:30（25 分）

1. 趣旨説明・講師紹介
市川美智子

この分科会は、特定非営利法人 日本医学図書館協会（以下、JMLA）が企画、健康情報サービス研修ワーキンググループ（以下、WG）が実施する。分科会 A は 1 日を通して行い、WG が構築した図書館員向けの研修プログラムの一部を体験し、執筆した出版物をじっくり読んでいただいたうえで、みなさまからのご意見を拝聴したいと考えているからである。

2. 「ワーキンググループ活動報告」牛澤典子

・WG 発足のきっかけ

先進的な取り組みを行なっている鳥取県立図書館より、JMLA へ、2010 年に、鳥取県立図書館にて医療・健康情報サービスの研修を行なうと欲しいという依頼があった。そこで、このような全国からの要望に応えられるように、医療・健康情報サービス研修プログラムの構築（通常、2 日間で実施）、研修会で使用するテキストの作成、講師の育成を目的として 2010 年 6 月に WG が発足されたという説明であった。

・WG メンバーの紹介

医療系図書館（医療系大学図書館、病院・患者図書室）と、公共図書館がちょうど半々

で構成されているとのことであった。

- ・WGのあゆみ

2010年、静岡県での情報交換や事業の方向性を検討するワークショップ、鳥取県立図書館での研修、岐阜県図書館協議会での研修の実施。2011年、宮崎県立図書館での研修。

あわせて、宮崎での研修プログラムおよび全体のアンケート結果の紹介があった。

3. 「医療・健康情報サービスの現状」 柚木聖

- ・医療・健康情報サービスとは

非専門家である一般向け（患者・市民を対象とした）の医療・健康に関する情報提供のサービスである。現在、「医学情報」「医療情報」「健康情報」などさまざまな用語が使われている状況であるという、定義についての説明があった。

- ・医療・健康情報サービスが求めたれる背景

「日経テレコン」を使用し、調査したところ、1980年代から2000年代まで「医療」「健康」に関する内容の記事は14倍以上増えている。また、医療・健康を取り巻く社会の変化（医療界・医師患者関係の変化）も一因としてあげられる。

市民が、適切に判断をするためには、医療・健康に関する情報が必要であり、それが図書館に求められている。

- ・医療・健康情報の歴史

おおむね4期に分けられるということであった。

第Ⅰ期は、癒しとしての読書に注目されていた。第Ⅱ期である1990年頃から病院における医療・健康情報サービスが開始されはじめた頃。1994年、患者が情報にたどり着けなかった事例が投稿されたこともサービスが広がった要因の一つである。第Ⅲ期2001年頃から、公共図書館にも広がりはじめた。この頃公共図書館では、貸し出しサービスに加え「レファレンスサービス」「情報提供サービス」が重視されるようになってきた。文部科学省の提言も影響をあたえている。第Ⅳ期として2007年頃から、館種を超えたサービスが求められてきている。

- ・サービス開始のための要件

サービス開始の要件として、地域性（地域の需要）に即した情報提供、効果的なPRなどが必要である。

闘病記は、NDC分類では文学作品にうずもれてしまうので、医学のコーナーの脇に闘病記コーナーを設置するなど、先行事例も参考になる。

- ・医療・健康情報サービス、公共図書館において問題を解決するために

選書については、公共図書館では、医学系の出版社の出版情報が入手しにくく、また、評価する方法もわからないということであった。そこで、参考になる書籍やインターネットのページの紹介があった。

職員の研修や交流の場として、過去行われた研修会の紹介があった。

サービス方針の策定については、免責事項・対応指針（どの範囲まで対応するか）を明確にしておくことが大切であるということであった。事例として、免責事項などをインターネット上に公開されている図書館の紹介があった。

連携として、鳥取県立図書館、東近江市能登川図書館、川崎市立麻生図書館などの事例の紹介があった。

- ・最近あった出来事

「てんかん」患者の交通事故の事例を受けて、患者会が「誤った情報が出ているので、適切な情報提供の場として図書館を使いたい」という申し出があったそうである。図書館が情報提供の場として求められている事例であった。

- ・図書館紹介

東近江市能登川図書館などの写真の紹介があった。

4. 「医療・健康情報のレファレンス」高橋宏美

・公共図書館での事例紹介

公共図書館では「テレビでみた〇〇について知りたい」（最近ではがんワクチンなど）「専門医のいる病院を知りたい」「薬について自分で調べたい」といった質問が寄せられる。

・情報提供を行う前に

「対応範囲（図書館としてどこまで対応できるのか、免責事項を明確にしておく）」「留意事項（プライバシーの尊重）」「自館の資料レベル（規模により違う）」「連携（レフェラルサービス、他都市、他機関、専門知識のある知人などに問い合わせる）」「信頼できる情報（インターネット上の医療情報の利用の手引き）を参考に)」について知っておく、明確にしておく必要がある。

・病気について調べる

最初に確認することとして、「どのような情報を入手しているか」「どのくらいのレベルの情報を必要としているか」「必要としている人の年齢・性別は」「本人か、家族か」「既に入手している情報の情報源は」「心情についても知りたいのか」などがあげられた。確認しづらいときは、概略から。複数の分野の情報を提供し、インタビューをすすめる。病名ではないことを聞かれることもある。「潰瘍性大腸炎」を例に、「病気の概要」「分類の確認」「蔵書確認」「書架を直接探す」「インターネットによる調査」「雑誌・新聞の情報を探す」「闘病記・患者会情報を探す」という調査方法について、具体的な資料例を挙げながら説明があった。調査をする際に、上位の分類をみることも大切である、闘病記がタイトルから病名が判別しにくい、患者会の本は古いので、一度ウェブサイトを確認してから提供する、求められる情報に適したツールを利用する、といった調査のポイントの紹介があった。

・医療機関・医師について調べる

特定の病院よりも、「〇〇という検査のできる病院」「専門医がいる病院」など、条件からの調査を希望する利用者が多い。「地域から」「評価から」「専門・機能から」の医療機関の調査方法について例示しながらの説明があった。インターネットでは最新の情報ではない場合もあるので直接医療機関に問い合わせること、特定の病院を薦めているわけではないことを、伝える必要がある。

医師の調査は、「名前（漢字、読み方）」「現役か」「どこの地域か」「どのような情報源からその医師を知ったのか」について確認をするとのことであった。医師名簿は古いことが多く、注意が必要である。

・くすりについて調べる

まず、くすりの定義、くすりの種類、くすりの見方について説明があった。くすりを調べるときのポイントとして、医療用（先発医薬品・ジェネリック）か一般用か、そのくすりについてわかっていることは何かについてインタビューを行う。くすりのレファレンスツール（図書）、ウェブサイトの紹介があった。一般用医薬品の本は貸し出し用ではなく、レファレンス本が多いという。

5. 昼食休憩

企画（1）友達100人できるかな

テキストに従い、お昼休みを利用して「仲間づくり」を実践。

企画（2）宗太郎人気ポーズ投票

宗太郎人気ポーズ投票・人気キャラクター投票をしていただき、うみの親である高井陽氏（大田区立大森南図書館）に報告した。

6. 「医学・健康情報の評価」諏訪部直子

- ・医療・健康に関する疑問の種類

医療・健康に関する疑問には、「バックグラウンドクエスチョン（基本的な知識を問う）」と「フォアグラウンドクエスチョン（臨床寄りであり具体的、診断や治療法を決めるための疑問）」がある。解決したい疑問の種類により情報源を選択していく。エビデンスが確立されていない場合には、PubMed や医中誌による個別の研究（文献）調査を行う。

- ・健康情報評価の観点

健康情報評価には「情報項目」「情報内容」「エビデンス」の 3 つの観点からの評価がある。

情報項目の評価は、発信元、情報源、日付、目的などの掲載の有無で行う。

情報内容は、利点や危険性についての記述の有無、公平でバランスが取れているか、不確実性に言及しているかなどで評価を行う。

- ・エビデンス

「効果があるのか」「病気の原因が何か」ということを証明できる「科学的裏づけ」のことである。

エビデンスの有無を見分けるには、「人間を対象とした研究である」「2 つ以上のグループとの比較がされている」「信頼性が高い方法で研究がされている」「査読雑誌に論文として発表されている」ということなどがポイントとなる。

- ・健康情報評価のためのツール

健康情報サイト評価ツール（イギリスで作成された DISCERN という評価ツールの改訂版）と健康情報評価フローチャートを紹介。

健康情報評価フローチャートでは 6 つのステップに従い評価をしていく。「具体的な研究に基づいているか」「研究対象はヒトか」「学会発表か論文か」「専門誌に掲載された論文か」「研究デザインは RCT や前向きコホート研究か」「複数の研究で支持されているか」この 6 つがすべてある場合には信頼できる情報といえる。実際の講義では、新聞記事を用いて、健康情報を評価することのこと。

7. 「選書」塚田薫代

- ・地域・ニーズを知る

地域・ニーズを知ってもらうために講義では、図や表など、ビジュアルで示している。少子高齢化が進んでいる、死因順位、死因別死亡割合、がん拠点病院の場所、市民意識調査（医療に関する項目の関心の割合）などが利用できる。これらを元に、マーケティングリサーチ（その地域の特性の特色・状況を把握、行政の方向性を把握）を行うことを提案している。

- ・選書の実際

館により、どの程度の専門性を求めるか、どこまで網羅するかが変わってくる。〇〇まで揃えなければならない、というわけでもない。そのため、的を絞って資料を収集してはどうか。

医療・健康情報は時系列で必要な情報が変わってくる。公共図書館・学校図書館・患者図書室では暮らしを支える選書、「Before（予防）/After（予後）」を支える情報を収集してはどうか。

医学書の鮮度は 5 年を目処といわれている。その根拠はテキスト p. 87 を参照されたい。ただし、解剖書・生理学・闘病記（患者心理）などの例外もある。

代替療法についての説明、注意点が書かれた本の紹介もあった。

選書チェックリストはテキストに掲載されているが、それがすべてではない。

リクエスト本にどう答えるか、例えばエビデンスのある本を置いてこそ、バイブル本とのバランスが取れるのではとのことであった。

闘病記も、気持ちを支える資料としてエビデンスのある本とともに置いてはどうか。

絵本（児童書）も有用である。

市民から求められているデータ（住民意識調査など）を用い、戦略的な選書をしてはどうか。ここでいう戦略的とは、あるべき姿を達成するためのシナリオである。

経済的視点として、公費負担の情報、民間支援の紹介をしてはどうか、学習指導要領にくすり教育について触れられているので、学校図書館へできる支援もあるのではないかな。

ニーズを把握し、エビデンスを確認し、気持ちを支えた資料を選書していこうとい

・ブックトーク

ダウン症の患者家族との体験談を語りながら絵本「スマッジがいるから」のブックトークが行なわれた。

8. 質疑応答・まとめ

・講師より

＜牛澤氏＞

本日のプログラムはダイジェスト版だが、この研修の良さがわかっていただけたと思う。昼休みの間によいテキストだといわれた。これからも事業を続けていくので、やってみたいという方は名乗り出て欲しい。

＜柚木氏＞

鳥取・岐阜・宮崎・静岡すべてに参加。今までアンケートは実施してきたが、各地のサービス状況は、現地に行ってはじめてわかる部分も。その土地の実情にあわせたサービスを行っているところが多い。

＜高橋氏＞

困ったとき、悩んだときにレファレンスの章は参考になる。連携に関心を持っている。公共と医療系図書館が繋がると幅がひろがるのでは。

＜諏訪部氏＞

普段学生や医療者への情報提供。「この病気って」「検査値って」という質問は受けない。公共図書館はいろいろなレベルのことに答えている。どちらが上とか下とかはない。連携をし、得意なところを、できるところを補うことで市民全体へサービスを行えばと思う。

＜塚田氏＞

公共図書館や学校図書館と繋がる、退院したこどもをどう支援していくのが軸足。今後は学校や社会ではまだ理解がされていない面もある「発達障害」について情報提供をしていきたい。同僚、同じ学生として何ができるのかなど。

・質疑応答

＜埼玉医科大学図書館 小野澤氏＞

映画館で60歳よりシルバー料金で利用できる。その都度申告するのは恥ずかしい。或る日から、「このどちらに該当しますか」とシルバーか否かを指で示し、口頭で言わずにすむようになった。

最近では図書館のバーコードは書名をみせずに貸出ができるようにというプライバシーに考慮されている。

医療・健康情報といえば、デリケートなサービス。注意する点、気をつける点があれば教えて欲しい。

＜柚木氏＞

分館勤務。サインを充実し、可能な限り利用者が自分で探せるよう工夫をしている。

レファレンスカウンターでトーンを下げて話をする。

利用者と顔見知りになってくると、安心して話もしやすくなるようだ。

＜高橋氏＞

レファレンスは奥の調べもののコーナーで対応。

利用者にレファレンスサービスが浸透していないのではないかなと思う。

登録カウンターで質問されることもあり、短時間で解決できそうなときは、その場で対

応するが、長くなりそうな時には、調べものコーナーに移動して話を聞く。

小声で話をするようにしている。病名をメモで渡されたときは、紙に書いてお返しすることもある。

利用者により、オープンな方とあまり他人に言いたくない方がいる。遠まわしに入って、「実はこれを探している」と言われることもあり、初対面で心を開くのは難しい。

<小野澤氏>

公共図書館では難しさを経験していることがわかった。

<奈良県医科大学付属図書館 鈴木氏>

闘病記文庫がある。一般の方との交流できる場、リピーターもいる。普段は学生や研究者を対象、レファレンスの質が違うため、構えてしまう。慎重に対応している。「病気について知りたい」といわれると答えに躊躇する。

このテキストは参考になるので、定期的に改訂をしてほしい。

<市川氏>

続けていくためにはみなさんのご協力が必要。

このテキストがあれば、講師ができそうという方、一緒に WG で活動してもよいという方との呼びかけに、数名の手が挙がった。

今まで同様、地方での研修がよいという方、東京など立地のいいところに集まっての研修がよいという方についても尋ねたところ、地方へ赴いてという人の方が多かった。

遠征をするのは難しいため、このテキストを用いて、各地で講師協力をいただきたいとのことであった。

<川崎市立井田病院 荒木氏>

5 月新棟オープンに伴い、患者情報コーナーを設置した。新しい本が買えないこともあり、公共図書館との連携を考えているが。

<市川氏>

このテキストの執筆者でもある川崎市立中原図書館の舟田氏に連絡をしてはどうか。中原図書館にも問い合わせをしてみてもどうか。テキストに連携の際の注意事項も記載があるため、参考にしてほしい。